日本の政治

田中角栄・角栄以後

田原総一朗

講談社

112
023
94E
S
112
E31
1

日本の政治

田中角栄・角栄以後

田原総一朗

現代国际关系研究所
—CICIR—
图书馆藏书

講談社

BY/DT72/07

2003年5月25日

RB

日本の政治　田中角栄・角栄以後

目次

まえがき……8

第一部 ロッキード裁判は無罪である

第一章「角栄は狙い撃ちされた」……14
田中政治とは何か／「アメリカに殺られた」／CIAの謀略か／
三木の「角栄潰し」／コーチャンの嘱託尋問／
「なぜ、五億円か」／八ヵ月後に催促？／田中は売国奴か

第二章 誰かが嘘をついている……46
賄賂を放置？／「相談もしていない」／一〇〇〇万なら渡したのか／
裁判官の憶測／田中は「記憶にない」／檜山が「落ちた」／
矛盾する証言／別のストーリーがある

第三章「捏造」されていた検事調書……74
被告がテレビに／榎本へのインタビュー／検事のネタ元は誰だ／
取調べにはなんでもあり／松岡への誘導尋問／
調書の辻褄合わせ／検察は喋らせすぎた

第四章 消されたアリバイ……105
「検事さんに教えられる通り」／「清水ノート」の出現／
揃って同じ間違いを……／大雪の中で受渡し!?／
「目白へ現金」は不可能／死人に口なし／あまりにも不自然
第五章 秘書・榎本敏夫の告白……130
榎本、突然口を開く／逮捕直後に自供／調書の日付が違う／
「検事にだまされた」／トリックプレー／「簡単に落ちそうだった」／
十八年ぶりの直撃／弁護団の分裂／重ねて記す！ 角栄は無罪だった

第二部「地球の彫刻家」たらんとす

第一章 使える男、角栄誕生……164
「金を出せば議員になれる」／能力に絶対の自信／拘置所からの出馬／
明日の理念より今日の生活／堤防・鉄道・トンネル／
「裏日本」克服のために
第二章 公共事業の魔術師……188
長岡を獲る／ダメなら土下座／越後交通の誕生／
田中マジック／「雪は災害」／河川敷開発の疑惑

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

第三部 コンピュータ付きブルドーザー

第一章 官僚を魔法にかける術……212

権力奪取の方法は何か／「法律は生き物だ」／前例を探し出せ／「ニッチ」だった建設省／「学者は人間を知らない」／インテリの上に立つ／天下取りへの第一歩

第二章 誰がための「金権」か……239

裏金が表金の二倍以上／「田中軍団」その強さの秘密／二〇〇億が消えた／抜群の集金力／金の井戸を掘る男／「オレは事業家だ」

第三章 今太閤の金配り……265

水を得た魚／地下室に紙幣印刷機？／悪役を演じる／繊維交渉を解決／泥を被る／田中派旗揚げ／「道楽だと思って」

第四部 葬られた列島改造論

第一章 理屈より処方箋……296

自民党の反省／日本全体を一つの都市に／反対押し切り「箇所づけ」／改造ブームに沸く／狂乱物価の裏で

第二章 ブレーキの壊れたブルドーザー……318
ブレジネフ、渋々「ダー」／列島覆う石油パニック／
「改造論復活」の思惑／金まみれの参院選／暴かれた舞台裏
なぜ弁明しなかったか／ついに退陣へ

第五部「唯角史観」政界を席巻す

第一章「角影」に怯える宰相たち……348
椎名裁定から三木おろしへ／締まり屋に浪費をすすめる／
史上最大の選挙戦／「角影内閣」の誕生／四〇日抗争と大平の死／
苦悩する闘将軍／恩赦を求めて／中曾根の「男の約束」

第二章「法王」の恐怖政治……374
「つなぎ」のはずが長期に／「同日選をやれ」と厳命／ショック療法／
実刑判決下る／角栄倒れて行革進む／「田中曾根」の限界

第六部 角栄倒れてなお「角影」は続く

第一章 田中支配の終焉……398
「創政会」結成前夜／「反乱ではない」／便利屋としての竹下／
竹下指名、本当の理由／消費税とリクルート／呪われた竹下政権

第二章 破壊者・小沢一郎の挫折……424
致命的なミス／「クーデターやな」／竹下・小沢対決／
経世会の分裂／「大命降下のような」／ガラス細工の連立政権／
小沢、すなわち「悪」／忍耐なき改革者

そしていま
田中政治の呪縛を断ち切れるか……457
経世会への挑戦／乱暴きわまる財政再建／橋本と大蔵省の失政／
金融危機の幕開け／隠し続けた不良債権／大手術から逃げて／
アカウンタビリティーの欠如／なぜ梶山でなく小渕か／
小渕の「モルヒネ」／国民の憎悪の的／ラストカード、危うし

あとがき……490

ブックデザイン
日下潤一

日本の政治

田中角栄・角栄以後

まえがき

田中角栄とロッキード裁判は、長い間わたしにとって、解答の出せない重い宿題であった。

わたしは、七六年七月号の「中央公論」に「アメリカの虎の尾を踏んだ田中角栄」というレポートを書いた。これがフリージャーナリストとしてのスタートとなった。

田中角栄がオイルメジャー依存からの脱却を図って、積極的な資源外交を展開した。そのことがアメリカに睨まれて、アメリカ発のロッキード爆弾に直撃された、という問題提起であった。

このレポートの取材をしたことで、毀誉褒貶の極端に激しい田中角栄という政治家に、それゆえに強い興味を覚え、ロッキード裁判に注目せざるを得なくなった。

今回の取材は二六年間の宿題を、わたしなりに解き明かすことであったが、ロッキード裁判の疑問、矛盾に挑む、と親しい編集者たちに話すと、大半が「そんなムチャは止した方がいい」と忠告した。一審、二審、そして最高裁まで〝有罪〟となった裁判の判決に、裁判には全く素人のわたしが挑むのは暴挙に等しい作業だというのである。そう

かもしれないと思った。

だが、担当弁護士や検事たちの取材を重ねるにしたがって疑問や矛盾が次から次へとあらわれた。率直にいって〝被告〟にされた人間たちにも、矛盾やウソがあり、検事や弁護士側にも苦しい、というより破綻した辻褄合わせやウソが少なからずあった。それらを摑むと、矛盾の解明、謎解きの、有無をいわせぬ吸引力に引き込まれてしまった。暴挙か否かを考える余地など全くなくなってしまった。取材を進めるにつれて、わたしは少なくとも裁判としては〝無罪〟と判断せざるを得なくなった。

わたしが、はじめて田中角栄と一対一で長時間話したのは、八一年二月号の「文藝春秋」で四時間以上かけてインタビューしたときであった。立花隆の〝金脈レポート〟を契機に金権批判の波に呑まれて、七四年一一月に首相を辞めて以来、六年ぶりにメディアに登場したのである。

この時期、田中角栄は日本の政治を腐敗させた〝元凶〟として、新潟県民を除く全国民、全マスコミの敵とされていた。

わたしの質問に対して、田中角栄は終始おそろしく真面目で、事実関係を幾度も訂正し、同席した早坂茂三秘書に確かめ、あるいは天井を見上げ、目を閉じて考え込むなど、事実を正確に話そうと努めていた。

〝政界の首領（ドン）〟〝闇将軍〟といったイメージとはまるで違う謙虚さを随所で示し、マスコミの総攻撃を受けている困惑や、気弱さまで滲ませた。かと思うと、エネルギッシュ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

に、息を継がずに話を畳みかける。夥しい政治家、官僚たちの名前、そして彼自身が作った三三件の法律の手品のような成立のさせ方を、次から次へとこまやかに明解に語りつづけた。驚異的な記憶力であった。田中角栄の人間性、そして魅力を曝け出した四時間であった。

ところが、ゲラの段階で、苦悩や怒り、あるいは困惑や反省といった人間的な部分は全部切り落とし、興奮すると吃って新潟なまりになる、人間性が滲む箇所も全て落として、特徴のない標準語に変えてしまった。田中角栄自身が、一二時間以上もかけて赤エンピツで訂正したのである。

わたしが早坂茂三に、「あれほど魅力的でドラマチックだったインタビューを、なぜこんな平板でつまらないものにしてしまったのか」と抗議すると、「ぼくもあなたと同じ意見だが、ぼくやあなたがいくらいっても田中は変わらない。それが田中角栄なのだ」と答えた。

いまにしてみると、田中角栄は四方八方の敵と死にものぐるいで戦っていて、自分の魅力や面白さなど考える余地が全くなかったのであろう。

希代の政治家田中角栄は、首相を辞めても〝闇将軍〟として君臨しつづけた。そして一七年前に脳梗塞で倒れ、九年前に亡くなったにもかかわらず、いぜんとして〝田中政治〟が続いている。いまや〝田中政治〟は負の遺産となっているのに、自民党も野党も〝田中角栄の呪縛〟から逃れ出ることがない。

田中角栄の政治、そしてそれ以後小泉純一郎首相にいたる歴代首相がなぜ〝角栄の呪縛〟を断ち切れないでいるのか。同時代を生きる人間の責任として、わたしは渾身の力をこめて書いた。ご高評いただきたい。

第一部　ロッキード裁判は無罪である

第一章「角栄は狙い撃ちされた」

ロッキード事件は首相の犯罪として裁かれ、田中角栄の死をもって、一九九三年一二月、「被告人死亡につき公訴棄却」となって歴史の表舞台から消えた。

しかし、わたしにはいまだに釈然としないいくつかの記憶がある。

ロッキード事件をあらためて点検するために、事件の捜査、そして裁判に関わった検事や弁護士たちに、ときには無理を承知で頼み込み、出来る限り会って話を聞いた。

すると、思いもかけない新事実や、定説を覆す証言が、少なからず出て来た。

特に、事件の捜査を担当した東京地検特捜部検事の一人（特に名を秘す）は、田中角栄の有罪判決を引っくり返す驚くべき話をしたのである。

「丸紅の伊藤宏が、榎本敏夫（田中角栄の秘書官）にダンボール箱に入った金を渡した四回の日時と場所については、どうも辻褄が合わない。被疑者の一人が嘘を喋り、担当検事がそれに乗っ

てしまった。いままで誰にも言ってないけれど、そうとしか考えられない」

五億円の授受があった四回の日時と場所は、実は検察の書いた筋書とは違う――検事が、みずからの告発で最も重要な根拠となった事実を否定したのである。

その特捜検事は、それを「被疑者の罠」だと言った。被疑者が担当検事の追及につい迎合したくなり、検事の興味をひきそうな話、あるいは単語を喋ってみる……。「被疑者の罠」とは興味深い言葉だが、とすると、一審、二審、そして最高裁の裁判官たちも「被疑者の罠」に引っかかり、誤った判決を下してしまったということになるのか。

彼は、さらに「田中・榎本弁護団が戦術を変えて、その点を突いて来るのではないか、それが、ものすごく怖かった。しかし彼らは（戦術を）変えなかった」と、ほっとした口調で言った。田中弁護団が、もしも戦術を変えて、四回の受け渡しの場所と日時の矛盾を突いてきたら、田中角栄が〝シロ〟となった可能性がきわめて高かったというわけだ。

実は、検察の書いた四回の授受の筋書が間違いだと早々に知っていて、冷や汗をかきながら裁判を進めた検事は、この特捜検事一人ではない。

では、なぜ田中弁護団は戦術の転換をしなかったのか。

実は二審を戦うにあたって、田中・榎本弁護団で激しく意見が割れ、大議論の末「戦術を変える」ということになった。だがそのためには、何よりも田中角栄に説明して納得して貰わなければならない。弁護士たちには、それが容易な作業ではないとわかっていた。時間をかけて事細かに説明しなければならないと考えた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c